北海道で！縄文を知る　第10回

：縄文世界遺産〈かってにフットパス〉
かってにフットパス番外編「遺跡の名は。」

小杉　　康（こすぎ　やすし）
北海道大学大学院文学研究院考古学研究室特任教授

1959年埼玉県生まれ。明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学（考古学専攻）。日本学術振興会特別研究員、国立歴史民俗博物館外来研究員、明治大学文学部助手、北大大学院教授を経て、現職。主要著書に『縄文のマツリと暮らし』（岩波書店）、『縄文時代の考古学』全12巻（共編著、同成社）、『はじめて学ぶ考古学』（共編著、有斐閣）、「考古学用小考」（駿台史学、第85号）など。日本考古学協会会員、北海道考古学会会員。

昨年８月から連載が始まった本シリーズも本号で10回目、９月号を皮切りに隔月で掲載してきた〈かってにフットパス〉も残すところ２つの縄文世界遺産の構成資産（大船遺跡と垣ノ島遺跡）になりました。当初の計画では、一番北に位置するキウス周堤墓（しゅうていぼ）群から歩き始め、四季がめぐるなかで遺跡ごとに比較的歩きやすい時期を目論（もくろ）んで順番を決めました。しかし雨が多かった８月の天候不順（函館）がたたり、早くも〈かってにフットパス〉の２回目から予定通りにはいきませんでした。結果として南下する順番での掲載になったので、むしろこの方がよかったかもしれませんね。

そして本号でもお詫びからの書き出しとなりました。昨年末、本格的な雪のシーズンになる前に、つぎの目的地である大船遺跡まで歩き、３月初旬には原稿を仕上げて、５月号に掲載する予定でした。しかし12月に入ると予想外に雪が早く、あれよあれよという間に根雪になってしまいました。北海道では通常雪で閉ざされる冬期間は公園などの野外施設はもちろんのことですが、整備された史跡なども立ち入り禁止、閉鎖されるところがほとんどです。先に紹介した世界遺産の遺跡の整備に関わる委員会の席上では、むしろ雪で覆われた姿の遺跡こそ、他の季節では味合うことのできない魅力があることを力説し、スノーシューでの見学ツアーなども提案しました。関東生まれの私にとっては雪の中を歩くこと自体が魅力的で、しかも厚い積雪があれば、通常は歩けないコースでの雪中の遺跡散策が可能になり、新たな「遺跡景観」の発見にもなると日ごろから楽しみにしていたのです。しかし、史跡を管理する自治体としては、駐車場の確保などの冬場の交通の便や安全面への配慮から、すぐに実施することは難しいことのようでした。このような発言をした私ですが、今回の縄文世界遺産〈かってにフットパス〉では最寄りのJRの駅から目的の遺跡に至るまでの長距離のなかで、国道や道道などの区間も多くあるので、交通安全の面から、雪中の歩行を断念することとしました。よって今回は〈かってにフットパス〉は１回お休みをいただき、最終号となる本年７月号（第12回）に「大船・垣ノ島遺跡で！かってにフットパス」を掲載したいと思います。最終号では総括として、ちょっとかっこいい(?)ことも言って終わりたかったのですが、それはともかく、少し紙数の余裕がある本号でこれまでの歩行の記録を簡単に整理しておきます。また、良い機会ですので遺跡の名前についての蘊蓄（うんちく）もここで紹介しておきましょう。

これまでに歩いた〈かってにフットパス〉

「キウス周堤墓群で！かってにフットパス」

掲載紙：2022年９月号
エリア：千歳市・恵庭市
歩行日：2022年７月９日
歩行距離：24km
最寄り駅：千歳駅 → サッポロビール庭園駅

「北黄金貝塚で！かってにフットパス」
掲載紙：2022年11月号
エリア：伊達市
歩行日：2022年８月15日
歩行距離：26km
最寄り駅：黄金駅 → 有珠駅

「入江・高砂貝塚で！かってにフットパス」
掲載紙：2023年１月号
エリア：伊達市・洞爺湖町・豊浦町
≪コースA：有珠駅～礼文駅≫
歩行日：2022年10月31日
歩行距離：34km
≪コースB：有珠駅～豊浦町市街地～小幌駅≫
歩行日：（㉗～㉟区間）2022年９月11日
歩行距離：（１日目）20km＋（２日目）32km

「鷲ノ木遺跡で！かってにフットパス」
掲載紙：2023年３月号
エリア：森町
歩行日：2022年９月22日
歩行距離：25km
最寄り駅：渡島沼尻駅 → 森駅

「遺跡の名は。」

皆さん、遺跡の名称はどのようにして決まるのかご存じですか。ここでは縄文世界遺産の各構成資産を例にとって、そのことを紹介しましょう。縄文世界遺産が17の遺跡を構成資産として、それに２つの遺跡が関連資産として加わって成り立っていることは、これまでにも何回か紹介してきました。本シリーズでは北海道にある６つの遺跡を訪ねる〈かってにフットパス〉を実行中ということです。ここでは、北海道の６遺跡に限らず、19の全遺跡を対象にして、それぞれの遺跡名称について考えてみましょう。

遺跡の名称は原則として字名（あざめい）や小字名（こあざめい）などの地名が付けられます。日本国内の遺跡において、ときに同じ遺跡名があるのはそのためです。札幌市にある遺跡の大半は、例えば「K135遺跡」といったように、「H」「M」「N」「S」などのアルファベットと数字を組み合わせた暗号のようなちょっと変わった遺跡名です。しかし「Kは北区」、「Nは西区」、「Sは白石区」といったように、ローマ字表記した地名の頭文字に、そこの何番目の遺跡かを数字で示した命名法であり、やはり「地名」の原則は守られています。ここで問題としたいのはその点ではなく、遺跡名称の後半の部分です。縄文世界遺産には単に「～～**遺跡**」や「～～**貝塚**」となるものや、はたまた「～～**石器時代遺跡**」となるもの、「キウス」に至っては「～～**周堤墓群**」、秋田県の「大湯（おおゆ）」は「～～**環状列石**」です。一方、同じ環状列石であっても「鷲ノ木」は「～～**遺跡**」です。このような統一感の無さ、これらの違いは何なんでしょうか。ボランティアで縄文世界遺産のガイド等に関わる皆さんも、見学者からの素朴な質問にお答えできるように、この機会にその「なぜか」をいっしょに考えてみましょう。

まずは表１をご覧ください。遺跡名称が「遺跡」で終わる例は９つ（**遺跡：９**）、同様に**貝塚：６**、**石器時代遺跡：２**、**環状列石：１**、**周堤墓群：１**となります。表

表１　縄文世界遺産の遺跡名称と国史跡指定年

	遺跡名	指定年
北海道	キウス周堤墓群	1979年
	北黄金貝塚	1987年
	入江貝塚	1985年（「入江・高砂貝塚」として
	高砂貝塚	
	鷲ノ木遺跡	2006年
	大船遺跡	2001年
	垣ノ島遺跡	2011年
青森	大平山元遺跡	2013年
	田小屋野貝塚	1944年
	亀ヶ岡石器時代遺跡	1944年
	大森勝山遺跡	2013年
	三内丸山遺跡	1997年
	小牧野遺跡	1995年
	二ッ森貝塚	1998年
	長七谷地貝塚	1981年
	是川石器時代遺跡	1957年
秋田	伊勢堂岱遺跡	2001年
	大湯環状列石	1951年
岩手	御所野遺跡	1993年

のどこかにヒントはないでしょうか。そこで表の右端の欄に注目してください。各遺跡が国の史跡にいつ指定されたかがわかります。それぞれの遺跡の名称は指定されたときに登録された名称です。最も早い年代のものが1944年の「亀ヶ岡**石器時代遺跡**」と「田小屋野**貝塚**」です。次いで1951年の「大湯**環状列石**」、1957年の「是川**石器時代遺跡**」です。遺跡名としては変わり種の「キウス**周堤墓群**」は1979年の指定となります。その他は「**遺跡**」か「**貝塚**」のいずれかですが、見方によっては、1980年代以降はすべてそのいずれかであるとも言えるでしょう。最も新しいものは「大森勝山**遺跡**」などの2013年です。鷲ノ木**遺跡**（2006年）や小牧野**遺跡**（1995年）、伊勢堂岱**遺跡**（2001年）と同様に環状列石を擁する遺跡ですが、この四者は「大湯**環状列石**」のような遺跡の命名法になっていません。

さて、このあたりに何かヒントは隠されていないでしょうか。この謎を解くためには、回り道のようですが、まず「遺跡」とはいかに定義されているかを確認しておくことが大切です。考古学の研究を進めるうえで、もっとも基本となる用語（概念）が「遺跡」・「遺物」・「遺構」です。遺物は土器や石器などの手に取って動かせるもの、「動産的」などと説明されます。一方、「遺構」は竪穴住居址や土坑墓などの大地に造り付けられた「不動産的」なものです。そしてこの遺物と遺構とが一定の位置関係で大地にとどめられている状態と場所が「遺跡」です。遺跡の発掘と聞くと、遺物や遺構などの「お宝発見」のイメージをもつ方がいるかもしれませんが、発掘することによって失われてしまう「一定の位置関係」を記録して、それを再現できるような情報を取得すること、これが発掘調査です。この３つの用語のうち「遺構」が最も新しいもので、1960年代以降に普及します。これに対して、「遺跡」と「遺物」の登場は、日本で近代的な考古学が誕生した明治初年にまでさかのぼります。

その頃活躍した坪井正五郎という人類学・考古学者（当時は考古学と人類学とが未分化の状態でした）は、「石器時代遺跡の種類」として、１）貝塚、２）遺物包含地、３）竪穴、４）以上の三者が破壊・攪乱された状態、といった整理をしています。すでに「遺跡」と「遺物」といった用語が使用されています。未だ発掘調査の方法が確立されていなかった段階なので、これらはいずれも地表面で観察できる状態に対しての呼び名です。「竪穴」とは、完全に埋まりきってない竪穴住居址のことです。「貝塚」は大森貝塚を発見・発掘したE・モースが記したShell Mounds（シェル・マウンド）の訳語に由来する用語ですが、発見された当時はMounds（塚）と表現されるような凸状の地表面の高まりがあったことがわかります。貝塚は貝殻などの食料残滓や壊れた土器などを集中して捨てたところですが、竪穴住居址と同様に、現在では遺跡の一部を構成する遺構の１種類であると理解されています。「遺構」という理解と用語が成立していなかった段階では、１つの遺構をもって１つの遺跡として表現されていました。その名残が今日の遺跡名としての「〜〜**貝塚**」に引き継がれているようです。同じことが環状列石にも当てはまります。環状列石は正確には巨大な墓地（斎場）遺構ですが、その大きさゆえに漠然と１つの遺跡としても認識されて、「〜〜**環状列石**」といった遺跡名が用いられました。「遺構」の用語の普及（1960年代）以降に国史跡に指定された「キウス**周堤墓群**」（1979年）についても、同様な事情を引きずっていたようです。それを境とするわけではないと思われますが、さすがに1980年代になると遺跡の命名法も統一的になり、環状列石を擁する遺跡が遺跡名称として「〜〜**環状列石**」と呼ばれることはなくなります。

坪井正五郎と関連してもう一点、重要なことがあります。「石器時代遺跡」と表現しているところです。実は坪井の当時にあっては、「縄文時代」の名称も未だ登場していませんでした。「縄文時代」や「縄文文化」の名称は1940年代ころからやっと使いだされ、普及するのは1950年代以降です。それまでは「石器時代」や「先史時代」の呼び名の方が一般的でした。そしてその時代に属する遺跡は、「古墳時代」の遺跡と区別するために「**石器時代遺跡**」と呼ばれることがあったのです。「亀ヶ岡**石器時代遺跡**」や「是川**石器時代遺跡**」が国の史跡に指定された年代から、この辺の事情をう

かがい知ることができます。遺跡の名称あるいは命名法に統一感が無いと先ほど述べましたが、その意味では考古学史的には意義深い遺跡名であるとも言えそうです。

雪と縄文人

では、今回の予定変更の原因になった「雪」を話題として、縄文のお話をしましょう。縄文人は雪とどのように付き合っていたのでしょうか。

氷期が終わり、現在の暖かい気候につながる後氷期（「氷期の後の時期」の意味です）になると、海水面は高まりだし、約8000年前には日本海に対馬暖流が入り込みます。暖かい海面から蒸発した水蒸気は、大陸からの冬季の季節風に吹き付けられて雪雲となり、日本列島の脊梁山脈にぶつかり、日本海側に多くの雪を降らせる今日的な気候ができあがります。

現在では博物館でしか見る機会がなくなってしまいましたが（私も実際に使用する姿を見たことはありません）、太平洋戦争以前には雪国の生活の必需品として稲藁を材料とした「藁靴（雪靴）」や「蓑」がありました。稲藁の利用は稲作が始まる弥生文化以降のこととなりますが、樹皮や蔓などの稲藁以外の植物性の素材を利用したものが、縄文文化でも作られ使われていたことは想像に難くありません。ただし、植物性素材は多くの遺跡では土に埋まっている間に微生物や酸性の土壌によって分解されてしまい、遺物として残ることはほぼありません。縄文についての「衣」の内容は、実は最も不明な項目の一つです。江戸後期の越後魚沼（新潟県）の雪国の生活を記録した『北越雪譜』には、蓑と笠を身にまとい、雪靴をはいてかんじきを着けた人物の姿（図１）が描かれています。縄文でも雪靴を彷彿させるような「靴形土器」（図２ 長野県伊那市手良）が１点知られていますが（縄文中期か）、他に類例が無くて評価に困ります。ちなみに縄文晩期の遮光器土偶の「遮光器」とは雪眼鏡（今風に言えばサングラス）のことです。前出の坪井は、貝塚を残した石器時代の人たちは寒冷な気候の時代に暮らしていたと考えていました。揺籃期の考古学者は、土偶の造形から当時の風俗を読み取ろうとして、巨大なコーヒー豆を横倒にしたような眼部の造形表現を遮光器と考えたのですが、今日では否定されています。

図１ 『北越雪譜』のかんじきおじさん

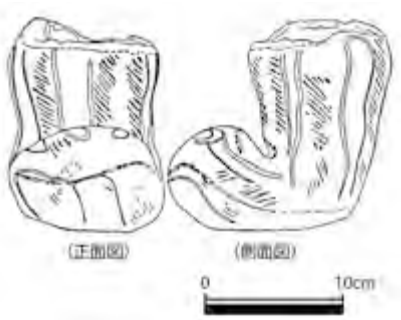

図２ 「靴形土器」（長野県伊那市手良）

縄文後期前半の環状列石は、大人の膝から腰の高さほどある大きな石を立て並べたものです。それらの多くの石をどのようにして運んだのか。これもまだよくわかっていないことです。橇のような運搬具を使用した可能性も指摘されています。橇であるならば、運搬効率が最もよくなるのはやはり冬季の積雪時ですが、これもそれ以上には議論は深まっていません。

北海道恵庭市のカリンバ遺跡の縄文後期後葉の大形の土坑墓（30号土坑墓）から７体と推定される人骨が発見されました。着装品や副葬品としての多くの赤漆塗りの櫛や腕輪を伴っており、その壮麗さに驚愕します。さて、このような多くの遺体について、一時期に埋められたのか、時間差をもって随時墓穴に安置された後に埋められたのかで、考古学者の間でも議論が分かれています。一時期に埋葬された理由としては、北海道のような寒冷地では積雪や地面の凍結によって冬場では地面に穴が掘れないために、冬期間に亡くなった人たちを、雪解けをまって一斉に埋葬した、といった考えなどが提起されています。実際はどうであったのか、なかなか氷解しない難問です（雪だけに）。

ちなみにカリンバ遺跡には「**キウス周堤墓群で！かってにフットパス**」（2022年９月号）で紹介した歩行コースから少し足をのばせば訪れることができます（コースポイント⑱－⑲間です）。皆さんも、本シリーズで紹介したコースマップに一足、ではなくて一手間を加えて、マイ・マップをお作りになってみてください。